

中等教育研究開発室年報 第 36 号 (2023 年 3 月 31 日発行) 別冊電子版  
2022 年度 授業実践事例

音楽科 高等学校第Ⅱ学年

混声 3 部合唱に取り組む Radwimps 「正解」

授業者 原 寛暁

(教育研究大会 公開授業)

広島大学附属中・高等学校

## 高等学校 芸術科（音楽） 学習指導案

指導者 原 寛暁

日時	令和4年11月26日（土） 第1限 9:30～10:20
場所	第2音楽教室
学年・組	高等学校Ⅱ年 芸術音楽選択クラス25名
単元	混声3部合唱に取り組む Radwimps「正解」
目標	1. 教材楽曲の構成をつかみ、必要になる表現の技術を考える（知識・技能） 2. 楽曲要素を分析し、表現が向上するような方法を検討する（思考・判断・表現） 3. パート内や他パートの響きを聴き合い、アンサンブルをする能力を高める。 (学びに向かう力・人間性)

### 指導計画（全7時間）

- 第一次 教材の音取り・歌詞の扱い方・強弱を把握する練習 2時間
- 第二次 合唱練習の中で（バランスなどの）課題を発見する 2時間
- 第三次 合唱録音を聴き、演奏を客観的に分析する。→相互コミュニケーションを行い、成果と課題を共有する。指揮者リレーで取り上げるテーマを設定する 3時間（本時 2/3）

### 授業について

本授業で教材として扱う楽曲「正解」は、授業者が最近になってその存在を知り魅了され、今回の授業計画で取り上げたものである。各パートそれぞれに適度な主旋律や聴かせどころが設定されており、歌詞も高校生の感性に合っている。授業者は、特にその歌詞に魅せられた。初めは”正解を与えてもらえない”不安を語るがそれは”大人も知らない”。だからこそ、”正解”は”与えてくれる物”では無く”自分で見つけるもの”だということを発見するのである。そして”正解”を発見していく道程は”あなたのこれからの人生”であるという、実に哲学的な内容である。

このクラスの生徒達は、楽器の演奏も歌唱に関しても前向きに活動できる。男女比があまり良くなり男子生徒が5名と少ない。しかし萎縮してはならず至って元気である。授業者としては、”男女がもう少し心理的距離が近くなれば”と願っており、それに向けて男女のアンサンブルを意識するような場面の設定を行いつつ、工夫をしながら進めている。

本校では全教科にわたって「広大メソッド」を意識した授業づくりが求められている。音楽科でもそれを意識し、日々の授業を進めている。その中核となるのは、生徒が主体的に「色々考え」「試し」「時に失敗し」「見直し」「整理する」という方向性である。それを意識した取り組みは、昨年度の研究大会で「生徒指揮者を中心とした器楽活動」のテーマで授業を実践した。生徒達は指揮者としてそれぞれ異なった課題意識を持ち、演奏者に要求を与えていくことが積み重なり着実な表現の向上に結びついていった。反面、器楽活動ならではの課題は、「楽器の演奏技術に左右される」という点がどうしても付随してしまう。今回は、同一のテーマで「合唱活動だからこそ出来るアプローチが出来るはずである。」という仮説の元に思い立った授業計画である。合唱活動の柱の一つは「ことば」である。音そのものに自らの感情をそのまま投入できることは、合唱ならではの利点であると考えられる。「探究的な視点」で生徒自らがこの楽曲を分析し、表現力の豊かさの向上に結びついてゆけるように生徒達を導き支えていきたい、と授業者として考えている。

**題目** 生徒による探究を軸にした授業づくり ー楽曲分析を取り入れた合唱活動ー

## 本時の目標

1. 生徒指揮者として適切に演奏評価を提示し、演奏の向上に繋げる。(思考・判断・表現)
2. 1に基づく合唱練習を通して、より表現豊かな合唱を達成できる。  
(主体的に学習に取り組む態度)

## 本時の評価規準 (観点/方法)

1. パフォーマンスに対し、生徒指揮者は適切な演奏評価ができる。  
(思考・判断・表現/生徒観察)
2. 指揮者生徒の評価を分析的かつ前向きに受け止め、歌唱表現を向上させている。  
(知識・技能/生徒観察及び録音記録 (次時に活用))

## 本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
(導入) ・始業>発声練習(スケールとハーモニー) ・前時までのおさらい(通し合唱)	発声練習(スケールハーモニー)  歌詞を意識して合唱する >成果と課題を分析する	朝の声が出にくい状況をリラックスさせ生徒を支援する フレーズの受け渡しを分かりやすく口頭で支援する
→ 生徒指揮者評価	見通す	生徒指揮者(代表)は前で鑑賞する or この生徒に指揮を振ってもらっても良い
(展開) 生徒指揮者1 > 評価	評価を意識しつつ合唱する 試行錯誤する >評価を受け止める	指揮者の評価を授業者の立場からフォローする
生徒指揮者2 > 評価	評価を意識しつつ合唱する >評価を受け止める	
生徒指揮者3 > 評価	評価を意識しつつ合唱する >評価を受け止める	
生徒指揮者4 > 評価	評価を意識しつつ合唱する >評価を受け止める	
(まとめ) 生徒指揮者5 > 評価	本日の向上面を総合的に評価し まとめる 次につながる成果と課題を意識しながら通し合唱を行う > 総合評価を行う >評価を受け止める	(生徒が楽譜に記録した後で) 本時の成果と課題を授業者の立場からコメントする >次時への見通しを提示する(指揮者5に言わせても良い)
<b>備考</b> 生徒指揮者の演奏評価が難航したら、前時までの生徒の演奏評価をまとめておき、必要な場面で電子黒板を使って示す(必要が無ければ行わない)		

## 実践上の留意点

### 1. 授業説明 高等学校Ⅱ年芸術音楽選択 公開授業

この学年では、Ⅰ年時から器楽活動とともに合唱活動を継続してきた。教材は、授業者が生徒の発達段階に応じて徐々に技術的難易度が上がるよう工夫し編成している。今年度に入ってから活動の幅を更に広げ、より範囲の広いジャンルの合唱に取り組んだ。授業者が発見した合唱教材で、Radwimpsの混声合唱曲「正解」を取り上げ、従来のパート練習⇒合唱の流れの中で授業者が主導して音楽的な指導を担う方法に加え、生徒自らが主体的に課題を発見し練習課題を組織し活動に結びつける方向性を模索し実践した。この楽曲は、「正解を教えてくれない」焦りや苛立ちから始まり、「大人も知らない」ことを知り、「ならば自分で見つけていこう」とする能動的な姿勢を生み出す変革が、楽曲の進行の中で見られる。そしてこのような展開が、演奏者である生徒や聴く者の心を打ち、感動を持って受容される主な魅力の1つとなっている。音楽の授業から離れた生徒達は、自分から望まない限りは音楽に触れることの無い環境に置かれていく。その時に、自らが培ってきた音楽の世界をさらに広げ、より発展させるような能動的な動きこそ求められる、すなわち「音楽の生涯学習」としての考え方を、自然と本楽曲は促す力を内包しているものであり、授業者が惹かれた点である。この授業計画の中で生徒たちに「指揮者リレー」というプログラムを課し（昨年度の器楽の取り組みから継続している）、大部分の生徒たちが指揮者を経験した。指揮経験を通し、その後演奏者に戻った際に以前よりも全体を意識して歌唱するようになることがねらいであったが、その目標は達成できたと考えている。一人ひとりの違ったアプローチの積み重ねによって確実に楽曲演奏の質が向上していく様子がしっかりと見られた。授業者は、この過程ではあくまで支援者として生徒に関わるように心がけた。

### 2. 研究協議会より

・生徒達が主体的に音楽を分析し、指導に生かそうとする姿勢が見られて良かった。

・このような姿勢が見られるような事前の指導は、どのように組み立てられたのか？

授業者>中学段階のうちに、色々な活動を通して相互評価を取り入れた活動を仕組んできた。具体的にそれがどのように結びついているのかははっきりとはしない面もあるが、総合的に培ってきたことも大きい。

・生徒主導で器楽、歌唱と取り組みを累積してきたのは分かったが、その中で指導者の役割とは何なのか？

授業者>やはり生徒では見つけられない観点は発生しているので、そこに誘導し気づかせて支援することが自動車の役割だと考えている。

・この方向性をここまでやってくる中で、行き詰まりや飽和を感じる点があるのなら、異なった方向性を模索し実践する転換点にさしかかっているのかも知れない（指導助言者）。

授業者>その点は自分自身でも感じている点である。「多様性」をどう捉えるのか、という観点を今後模索していきたい。